

群 教 七	G10 - 01
	平29.265集
	道徳

# 多様な考えに触れ、道徳的価値を 自分のこととして考えられる児童の育成

—自分の考えをはっきりさせ、広げ見つめるための  
道徳ノートの活用や話し合いを通して—

特別研修員 武井 幸子

## I 研究テーマ設定の理由

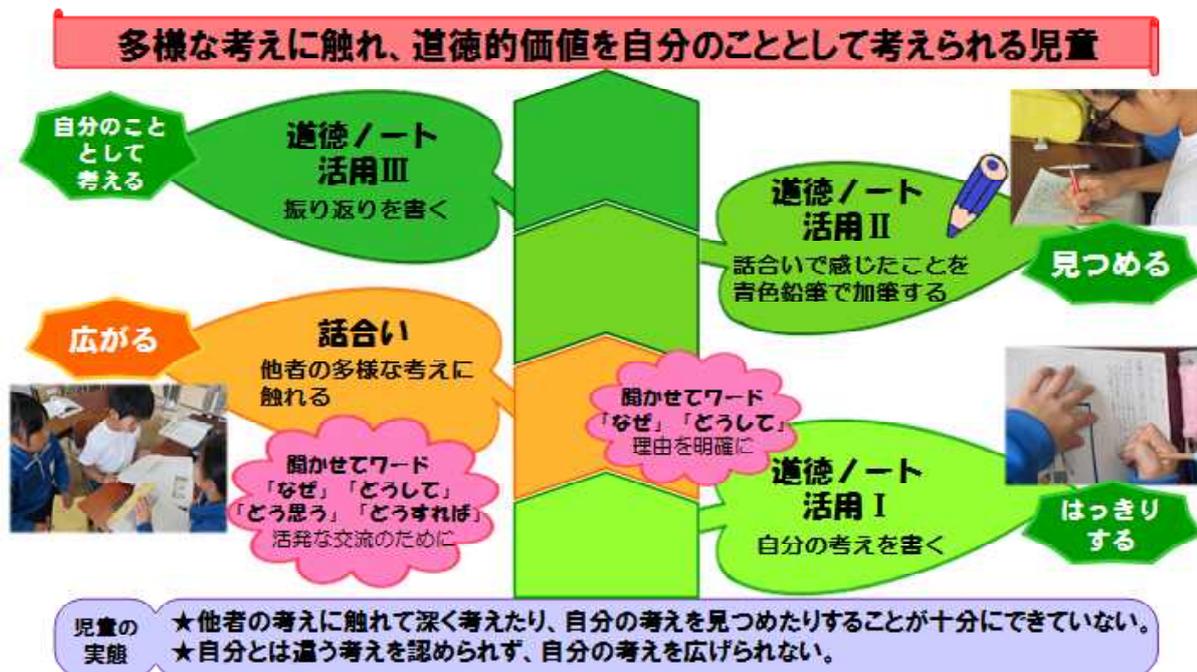
今年度、群馬県の学校教育の指針には、道徳の指導の重点として「他者の多様な考え方や感じ方に触れ、自己を深く見つめる学習の工夫」が挙げられ、ねらいとする道徳的価値に関わる事象を自分自身のこととして捉えて深く考えた上で、これからの生き方への思いや願いを深めていける児童の育成が求められている。

本学級の児童は、これまでの道徳の時間の中で、資料の中の登場人物の気持ちを考え、書いたり発表したりすることはできるようになっている。しかし、書いて発表することが中心になってしまい、他者の考えに触れて深く考えたり、自分の考えを見つめたりすることが十分にできていない。また、日常生活の中では、自己中心的な考えを相手に押しついたり、自分と違う考えを認められなかったりする児童がおり、児童間での問題が発生することもある。このような実態から、他者の多様な考えを受け入れ、自分の考え方を広げた上で、道徳的価値を自分のこととして考えていく力を高めていきたい。

そこで、初めに自分の考えをはっきりと持たせ、表現させるために道徳ノートを活用する。また、話し合いを通して、多様な考えに触れさせる。その後、道徳ノートで自分の考えを見つめさせる活動を通して、自分とは異なる多様な考えがあることを理解させる。このように、道徳ノートや話し合いの一連の活動によって今までの自分を振り返ることで、道徳的価値を自分のこととして考えられるようになると考え、上記のテーマを設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

「自分の考えを広げ、見つめる」ためには、自分の考えをはっきりさせた上で、他者の多様な考えに触れられるような話し合いをしていく必要があると考える。そこで、以下の二つの手立てを考えた。

### 手立て① 道徳ノートの活用

活用Ⅰ：「聞かせてワード」（なぜ、どうして）を使い、自分の考えをはっきりさせる。

活用Ⅱ：自分の考えを見つめさせる。

活用Ⅲ：自分のこととして考えさせる。

### 手立て② 話し合いの実施

・3人グループで、自分の考えをしっかりと表現させる。

・「聞かせてワード」（なぜ、どうして、どうすれば、どう思う）を使い、多様な考え方に触れ、自分の考えを広げる。

聞かせてワード  
自分や相手の考えの根拠を明確にするための言葉

### 手立て①（道徳ノート）について

児童が話し合いの中で、多様な考えに触れるようにするためには、まず自分の考えをはっきりさせることが必要だと考える。そこで、中心発問に対しての自分の考えを書くだけでなく、「聞かせてワード」の「なぜ、どうして」を使って考えの根拠を書かせることで、自分の考えをはっきりさせることとした【活用Ⅰ】。また、話し合い後に話し合っただけの感想や友達の良い考えを道徳ノートに青色鉛筆で加筆することで、最初に書いた考えと比較して自分の考えを見つめさせることとした【活用Ⅱ】。さらに、一連の活動（道徳ノートの活用Ⅰ・Ⅱと話し合い）で考えたことを基に振り返りを書くことで、道徳的価値を自分のこととして考えることとした【活用Ⅲ】。

### 手立て②（話し合い）について

より活発な話し合いができるようにするため、ペアよりも多くの考えを聞くことができ、4人グループよりも一人一人の話す量を増やすことができることから、3人グループでの話し合いを設定した。また、話し合いを行う際には、自分の考えをはっきりさせるために使った「聞かせてワード」の「なぜ、どうして」に加え、他者の考えの根拠を聞き出すために「どうすれば、どう思う」も使用して話し合わせた。そのことにより、多様な考え方に触れられ、自分の考えを広げることができると考えた。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- 道徳ノートの活用Ⅰでは、中心発問に対する自分の考えをはっきりさせる場面で、聞かせてワード（なぜ、どうして）を使って考えの根拠を書くことで、自分の考えをはっきりさせることができた。そうしたことで、一人一人が自信を持って表現することができ、話し合いが活発に行われた。
- 話し合いでは、「聞かせてワード」（なぜ、どうして、どうすれば、どう思う）を使うことで、「どうして」と聞かれた児童は文章には表せなかった思いを発言することができ、聞いた児童は自分とは異なる考え方に触れることができ、それぞれがより多様な考え方に触れ、考えを広げることができた。
- 道徳ノートの活用Ⅱでは、話し合っただけの感想や友達の良い考えを道徳ノートに青色鉛筆で加筆することで、最初に書いた考えと比較でき、自分の考えをしっかりと見つめることができた。
- 一連の活動（道徳ノートの活用Ⅰ・Ⅱと話し合い）を行ったため、最後の振り返り（道徳ノートの活用Ⅲ）で、道徳的価値を自分のこととして考えることができた。

### 2 課題

- 「聞かせてワード」（なぜ、どうして、どうすれば、どう思う）は、話し合いを活発にするためには有効であったが、資料によっては活用しづらい言葉もあるため、話し合いたい内容に合わせて提示する言葉を選択する必要がある。
- 道徳ノートの活用Ⅱの加筆（青色鉛筆）では、多様な考え方を基にし、短い時間で自分の考えを見つめられるようにするため、加筆の方法を検討する必要がある。

## 実践例

- 1 主題名 相手を思いやり親切に 内容項目B-(6)親切、思いやり (第4学年・2学期)  
資料名 「心と心のあく手」(出典 私たちの道徳)

## 2 主題及び本時について

### (1) 価値観

本主題は、新学習指導要領の第3学年及び第4学年の内容項目B-(6)親切、思いやり「相手のことを思いやり、進んで親切にすること」について深めることを意図したものである。この時期の児童は、友達も自分と同じ感じ方や考え方をしていると思いがちである。また、相手のことを思って行動しているつもりが自分本位の行動になってしまっていることもあるため、相手のことを十分に推し量る力を高めることが重要である。本資料では、相手の状況や思いを想像し、相手に対してどうすることが良いのかを考えて行動することが、本当の意味での親切な行動であることに気付かせたい。

### (2) 児童観

本学級の児童は、手伝いを求めると進んで行動する児童が多い。また、道具を忘れた子に貸してあげたり、欠席した子の代わりに進んで給食当番を手伝ってあげたりしている様子も多く見られる。しかし、手伝ってあげることが親切だとの思いから何でも進んで手伝っている児童がおり、手伝うことが本当に相手のためになっているのかまでは考えられていない。このことから、児童は、相手の気持ちや立場を考えるよりも、褒められたり認められたりしたいという気持ちで行動していることが多いと考えられる。そこで、相手のことをよく考え、自分の行動が本当に相手のためになるのかを考えさせたい。

### (3) 資料観

「ぼく」は、学校から帰る途中で、荷物を持ってとても苦しそうに歩くおばあさんを見かけ、声を掛けるも断られてしまう。母から、おばあさんは病気で体が不自由になり、歩く練習をしてあそこまで治ってきたらしいと聞いた数日後、再びおばあさんに出会う。「ぼく」は声を掛けようかと考えるが、そっと後ろをついて歩くことにした。家に着いたおばあさんの笑顔を見て、「ぼく」も心が明るくなり、本当の親切とは何か少し分かった気がするという内容である。本学級では、何でも手伝ってあげることが親切だと思って行動している姿が見られるため、身近な問題として考えやすい資料と言える。おばあさんが歩く練習をしていると分かっているが、前よりも大変そうにしている姿を見て、どうすればよいか迷っている「ぼく」に共感させ、自分だったらどうするかを考えさせることで、励ましや手を差し伸べることだけでなく、相手のことを考えて温かく見守ることも親切であることに気付かせたい。

## 3 本時及び具体化した手立てについて

本時では、道徳ノートに書いた考えを基に話し合いをしたり、話し合っただけで感じたことや友達の良い考えを道徳ノートに加筆したりすることで、自分の考えを広げ、見つめられるようにした。一連の活動により、道徳的価値を自分のこととして捉えられるようにしたいと考え、以下の手立てを実践した。

### 手立て① 道徳ノートの活用

主人公がおばあさんに声を掛けるか迷った結果、後ろをそっとついて行くことにしたことを押さえた後、自分だったらどうするかを考える発問で、「聞かせてワード」(なぜ、どうして)を使い、自分の考えの理由をはっきりさせて道徳ノートに記述する。【活用Ⅰ】

話し合いの後に、自分の考えの変わったところや友達の良い考えを青色鉛筆で加筆する。【活用Ⅱ】

今までの自分と授業の中で考えたことを比較し、振り返りを書く。【活用Ⅲ】

### 手立て② 話し合いの実施

中心発問に対する考えを話し合う場面で、3人グループを作り、自分の考えをしっかりと表現させる。

自分の考えとの相違点を考え、「聞かせてワード」(なぜ、どうして、どうすれば、どう思う)を使って友達の考えの理由や根拠を聞き出すように話し合う。



#### 4 授業の実際

導入では、「今までにどのような親切なことをしてきたか」を発表させ、価値への方向付けを行った。登場人物を押さえてから資料を範読し、図1のように「ぼく」とおばあさんの会話や気持ちを上下に分けて板書して内容を押さえた。

手立て①-I 自分の考えをはっきりさせるための道徳ノートの活用  
 発問：「ぼく」はおばあさんに何ができるだろうと考え、そつと後ろについて行くことを選んだが、自分だったらこの後どうすると思いますか。

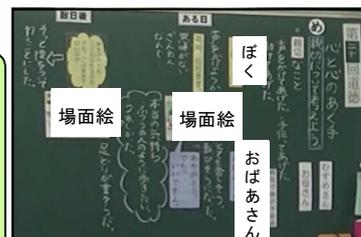


図1 資料内容の確認

上記の発問に対して、下の図2のように道徳ノートに自分の考えを記述させた。この時、「聞かせてワード」（なぜ、どうして）を使って理由も記述させた。理由を書かせることによって、行動の裏側にある心情をはっきりさせるようにした。

おばあさんが家に着くまで後からついて行く。おばあさんのことが心配だから。なぜ心配かというと、おばあさんはまだ完全になおっていないから。



図2 道徳ノートへの記述

##### 【声を掛ける】

- ・声をかける。また断られるかもしれないけど、おばあさんのことが心配だから。
- ・おばあさんに「歩く練習頑張ってください。」と言ってついて行く。なぜなら、おばあさんを応援したいから。

##### 【声を掛けない】

- ・「荷物を持ちますか。」と声をかけたいけれど言わない。なぜなら、おばあさんは一生懸命歩く練習をしているのに、また声をかけられたらちょっと嫌だと思うから。
- ・声をかけない。どうしてかというと、歩く練習をしているのに、邪魔をしたら失礼だから。
- ・声をかけられないと思う。なぜなら、また断られたらどうしようと思うから。

図2の記述や表の~~~~~のように、「なぜなら」や「どうしてか」というを使って、理由を付けて自分の考えを記述することができていた。

手立て② 聞かせてワード「なぜ」「どうして」「どうすれば」「どう思う」を使い、多様な考え方に触れ、自分の考えを広げるための3人グループでの話し合い

道徳ノートに記述した自分の考えを基に、3人グループでの話し合いを行った。活発な話し合いになるように、友達の考えを聞いて気になったことに対して、「聞かせてワード」（なぜ、どうして、どうすれば、どう思う）を使って質問するように指示をした。

図3のように、伝える側は、道徳ノートを見せるのではなく、道徳ノートに書いた自分の考えを読んで伝えていた。また、聞く側は、自分の考えとの相違点を見つけようと、友達の顔を見て聞いていた。このように、「聞かせてワード」を使い、考えの根拠を聞き出すような話し合いができていた。



図3 道徳ノートの活用と話し合い

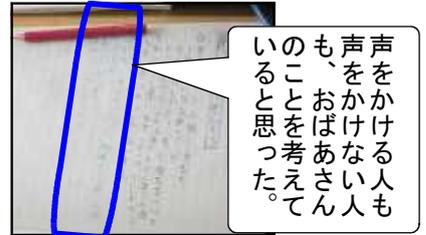
### 手立て①-Ⅱ 自分の考えを見つめるための道徳ノートの活用

話し合う前に書いた自分の考えと比較をしながら、自分の考えを見つめられるように、話し合いで気付いたことや友達の良い考えを青色鉛筆で加筆させた(図4)。書く内容に差はあるものの、自分と同じような行動を考えていても理由が違っていたり、自分とは違う行動をとると考えていてもおばあさんを思う気持ちは同じだということに気が付き、以下のように他者理解を進めながら加筆している児童もいた。



図4 話し合い後の加筆

- ・この場面での「手伝う」の意味は、見守るということだと思った。
- ・転んだりしたら危ないから、声をかけたほうが良いのかもしれない。
- ・見守るだけではなく、心の中で応援するのもいい。
- ・相手がどう思うかを考えることが大事なのかもしれない。



全体で考えを交流させた後、「本当の親切とはどんなことだと思うか」と問い、道徳ノートに記入させた。

- ・相手を思って行動すること。
- ・相手の気持ちを考えて、相手がしてほしいと思うことをしてあげること。
- ・そばで見守ってあげることも親切だと思う。
- ・心で思ってあげるのも親切。

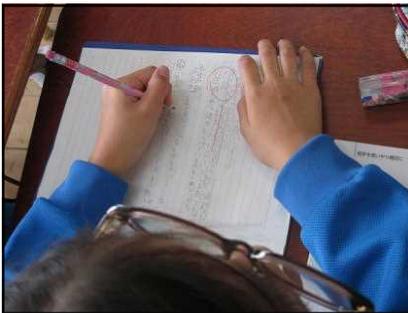


図5 振り返りの記入

### 手立て①-Ⅲ 自分のこととして考えるための道徳ノートの活用

最後の振り返りでは、約9割の児童が「相手のことを思って行動する」といった内容を書いていた(図5)。

- ・声をかけるのも大事だけど、そっと見守ってあげると言うことも、大事なんじゃないかなと思う。
- ・相手のことを思い、何でも手伝わずに大変なことだけ手伝う。
- ・相手のやっていることを考えて、手伝ってもいいのかを考えて手伝ってあげる。手伝えなくても、心の中で応援する。

## 5 考察

手立て①の道徳ノートの活用Ⅰで、中心発問に対する自分の考えを理由とともに記入させたことで、一人一人が自分の考えを明確にすることができた。このことが、手立て②の3人グループでの話し合いにおいて、友達に自分の考えをしっかりと伝えることにつながっていた。また、話し合いの際、書いた考えを伝え合うだけでなく、より多様な考え方に触れる話し合いになるよう「聞かせてワード」を提示したことで、友達の考えと自分の考えを比較しながら聞くことができ、互いに質問し合って考えを広げることができていた。

そして、話し合いの後に、手立て①の道徳ノートの活用Ⅱで、全員が気付いたことや友達の良い考えを青色鉛筆で加筆することができた。しかし、友達の考えをそのまま写しているだけの児童もおり、話し合いの内容に見合った加筆ができていないと感じた。やはり、自分のこととして自分の考えを見つめさせるためには、話し合い前の自分の考えと話し合った内容を比較して気付いたことを書くように指示したり、書き方の例を示したりする必要があると考える。

今回の授業を通じて、グループから全体への交流の持ち方も検討する必要があると感じた。3人というグループ構成は、短時間で話し合うには適切な人数だが、より多様な考えに触れられるようにするためには、他グループとの交流や全体での交流のさせ方も重要である。道徳ノートの活用とともに、発達段階に応じて3人グループの話し合いだけでなく授業形態の更なる工夫が必要であると感じた。